



# 先生方と 童話の話方について語る

檜 葉 勇

## ☆三要件の調和☆

A、子供たちに童話を話して上げたいと思いますが、どうしたらうまく話せるか、一つその秘訣を教えてくださいませんか。

B、ずいぶん虫のよい御註文ですね。併しそんな手品の種みたいな秘訣なんてありませんよ。まあ、せいぜい回を重ねることですね。ところでもう何回かお話をなさいましたか。

A、いえ、紙芝居なら殆ど毎日やつていますが、

B、そうですね、どこの幼稚園、保育所にも紙芝居の備えていない所はないでしょうし、紙芝居をしない先生もいないでしょう。というのには、紙芝居が、いつ、どこで誰でもという三条件が揃っているからです。ところがお話の方は、紙芝居以上に、いつでも、どこでも、誰でもやれる筈なのです。たゞ紙芝居のように、かげにかくれてやれないところから、誰でもというところまでに至らないのは残念なことですが、真に子供を愛する人ならば、きつと紙芝居同様にやれるにちがいありません。その上紙芝居や人形劇を一層生かす為にも、お話がよく出来るのが大切です。

A、それではこれから大いにやりましょう。私たちが今後お話をやつて行く上に、心得なければならぬ点はありますでしょうか。

B、それはあります。一話というのには童話に限らず総て三つの要件から成立つています A、三つの要件と申しますと

B、わかりきつたことですが、話者と対象と話材、この三つです。話者つまり話し手が対象つまり聴き手に、ある話材を伝える作業が話ですから、よい話とか上手な話というのはべらべら達者にしやべることではなくて、この三つの要件がよく調和されるということですよ、例えば湯川博士が原子力について講演される。もしその対象が幼稚園児であつたとしたら、どんな名講演も完全に失敗です。

## ☆「とき」と「ところ」☆

A、そうすると、私どもの話す対象は幼児ですから、いつも話材や話し方が幼児と調和されるように注意するのですね。

B、そうです、お話の対象となる幼児を知る事、これが第一番に大切な事です、あなた方は毎日幼児と共に暮しておられるのですから、この点大丈夫でしょうが、ところでお話を

する場合に、今の三要件に大きな影響を及ぼすもう二つの要件を考慮したいと思います。

A、それはどんなことですか、

B、「とき」と「ところ」です。「とき」を

広義に解するとその時代、狭義に解すると、

お話をする時が午前か午後か晴の日か雨天か

というような事になります。「ところの」方

も広義では環境、つまり同じ年令の子供でも

都会と農村によつて違つて来る。狭義ではお

話をする会場、保育室であるか遊戯室である

か或は野外であるかというような事が、お話

の上にいるいろいろの影響を与えます。ですから

お話は結局話者と対象と題材、それに「とき

」と「ところ」この五つの調和を常に考える

事が、まあ秘訣といえは秘訣でしょう。

### ☆童話の興味性

A、なるほど、少し分りかけましたが、私ど

もが子供にお話する場合、先ず最初にしなげ

ればならない仕事は何でしょうか。

B、それは何よりもよい題材を用意する事で

しよう。「とき」や「ところ」も考慮に入れ

て、対象たる幼児の為に、最も適切なよい話

を選択することが、最も肝要な事です。

A、ではその選択の標準をどんなところにしたいらよいでしょうか。

B 私には優れた童話は、興味性と教育性の二

つを具備すべきだと思います。興味性という

のは面白いということ、どんなよい内容があ

つても面白くなくては幼児に与える童話とし

ては不適当です。しかし面白くという

だけでなく一方教育的であることが望ましい

但しこゝに教育性といつたのは、狭い道徳的

な教訓という意味ではありませんが、

A、では興味性、面白い話というのは、どんな童話でしょうか。

B、そうですね、面白いという要素はいろいろありましようが、幼児の童話としては、

単純性 変化性 反復性 韻律性

親密性

などを挙げる事が出来ましよう。

単純性 というのは文字の通り複雑でない話

話の中に出て来る人物(動物でも植物でも)

が少くその性格がはつきりしていて、

事件のこみ入っていない話こそは幼児の心

理から当然のことです。併し単純は単調と

は違います。やはり変化を求めます。

変化性 というのは 活動性といつてもよい

でしょう。変化を喜び活動を喜ぶ幼児は、

お話がいつまでも同じところじつとして

いるに堪えられません。漫画や紙芝居が敏

迎されるのは、いろいろな理由がありま

ようが、速かな変化ということも一つの原

因です。ところで単純であつても変化とい

うのはいふん無理なようですが、次の反

復性によつてその道があるわけです。

反復性 はいうまでもなく、くりかえしでこ

れには同一の反復もあるし、類似の反復も

あります。桃太郎の童話では、犬猿雉子と

全く同一の事件が反復されます。三四の小

豚の童話では、類似の事件の反復です。

この反復によつて単純の中に変化が得られ

るわけですが、このため子供の想像力が活

潑に働き、そこから無限の喜びが湧き出ま

す。例えばあなた方が桃太郎の童話を話し

聴かざるとしまししよう。「桃太郎さんがき

びだんごを腰につけて鬼征伐に出かけると

途中で犬に出会いました、犬にきびだんご

をやると、犬がお供について行きました。

又少し行くと猿に出会いました。」というところまで話したとき、子供はきつとお猿も

きびだんごをもらつてお供について行くだ

ろうと先の方まで想像します。やがて自分の想像が適中して行くところに、何ともいえないうれしさがこみ上げて来るのです。

**韻律性** これは幼児が韻律期といわれる位でリズムを喜ぶ事です。「おじいさんが山へ柴刈に行きました」という説明文では満足しないで「どっこいしょ、やっこらせ、おじいさんが柴刈に行きました」とした方が興味を加えます。ワンワンとかシッポッポとか擬声を喜ぶのも同じ事です。こんな擬声が使われる場合成可く、擬声を先に出した方が効果的です。即ち「向うから犬がワンワンないて来ました」ではなく「ワンワンワン向うから犬がないて来ました」です。

**親密性** 子供特に幼児は自己本位自己中心です。童話の中に出て来る人物や事件が子供に親しみのあることが望ましいのです。外国の童話で、例えばらくだという動物が出て来るが、子供は全然らくだを知らない場合、らくだを子供に親しい馬か牛に代えた方がよいでしょう。但しらくだのこぶがその童話の中心となっている場合は別です。

## ☆童話の教育性☆

**A**、興味性ということば、よくわかりました。一方の教育性についておきかせ下さい。

**B**、これもいろいろありましようが、

**明朗性** 積極性

の二つを挙げて置きましょう。

**明朗性** というのは、明るい童話、暗い童話

の反対です。つまりあまり悲しい話怖い話

陰惨な話は避けたいと思います。

**積極性** はこれと似たようなことですが、何か悪い事をして後で罰を受けたとか後悔したとかというような消極的な話でなくて積極的によいことをするということばが望ましいのです。例えば仲の悪い兄弟があつて、毎日喧嘩ばかりしておかあさんを困らせていたが、何かの動機で仲よくなつたというような話をします。我々成人や大きい子供には「兄弟仲よくせよ」という教訓がよく理解されますが、幼児はこの話のどこよりも、兄弟の喧嘩するところが一番面白く、さつそく真似をしたくなります。幼児はまだ話を総合的に全体を把握出来ないで部分的な興味に過ぎず、その興味あり最も刺激を受けた点に模倣本能が動いて全く予

期に反する結果を招く事があります。

## ☆話材はどこに☆

**A**、承つて見ると、なかなかむつかしくて、うっかり話せませんね。

**B**、いや、そんなにむつかしく考えては困りますよ。まああまり道徳とか教訓とかにしばられないで、やさしい面白い話という位の気持で結構です。

**A**、でも私たちは、自分で創作出来ませんし

**B**、それはありますよ。これまで幼児のための童話集がたくさん出ていますから、その中で選ばれるとよいでしょう。尤も一冊の本の中の童話全部が、あなた方に役立つかどうかはわかりませんがね。幼児童話集という名はなくても、一般の童話集その他子供の読物新聞雑誌にだつて話材のところがついています。

新聞雑誌にだつて話材のところがついています。それに今創作は出来ないといわれたが、幼児の生活を見つめてごらん下さい、そこからいくらでも新しいお話が生れて来ますよ。体験見聞からも童話が創作されるし、話材に困ることがありませんよ。そうそう私の例を一つお話ししましょうか。

私が寒い朝ふと道ばたの水たまりに薄い氷

の張つているのを見ましたが、お屋頂またそこを通ると、もう氷が解けていました、この小さい事案から生れた童話のほん筋だけですがこういうのです。

小さい水たまりの中に一匹めだかがすんでいた。この水たまりはめだかのおうちである。そばを通る子供も犬もみんな小さな汚いおうちだと悪口をいうので、めだかは悲しかった。ところがある朝目をさまして見ると、いつのまにか銀色の屋根が出来ている。やがてお日さまに照らされてこの屋根がキラキラ輝いた。めだかは喜んで屋根を見上げていたがどうしたのか屋根に小さい孔があった。その孔がだんだん大きくなりとうとう屋根がなくなつた。めだかはぎつといつも通る子供たちが石を投げて屋根をこわしたのだと思つていた。一体めだかのおうちの銀色の屋根は、どうして出来たのだろう、そしてだれがこわしたのだろう。

### ☆よ い 言 葉

A、面白いですね、ほんの一寸したところを捉えたのですが、私どもにはなかなかむつかしいと思います。しかしこれからこの方面も

しつかり勉強しましょう。さていよいよお話をするとということになると、その言葉についてどんな注意をしたらよいでしょう。

B、もうあまり時間がありませんから簡単に申しますが、すべて言葉には二つの役目があります。一つは相手に解らせるということ、もう一つは興味を起させる、或はよい感じを起させるということです。「おいこら金を貸せ」という言葉は、解らせるという点では目的を達していますが、おそらく相手によい感じを抱かせることは出来ないでしょう。

A、解らせるためには、やさしい言葉を使えばよろしいのでしょうか、

B、そうですね、適当な声の大きさで、はつきり発音し、やさしい言葉で、あまり速くもなくおそくもなく、ときどき間(ポーズ)をおいて話すことが必要です。腹痛する、腹が痛い、お腹(おなか)が痛い、おボンボンが痛い、いろいろのいい方がありますよ、この中で相手に最も適した一つの言葉を選んでください。

A、そうすると自然、相手によい感じを抱かせることになりますね、

B、その通りですが、一步進めて上品な美し

い言葉も考えたいと思います。というときすぐ敬語が思い浮べられますが、幼稚園や保育所の先生方の中には、いささか敬語乱用の傾向があります。殊に何にでも御をつける癖がありますが、お新聞、お机、おべんとうはよいとしても、お新聞、おオルガンはどうでしょう。

A、まあひどい、そんなこと申しませんわ。

B、いや、ときどき耳にしますよ。一体上品とか美しい言葉というのは、単語としてその言葉だけ取り出しては決められないのです。

例えば「おくさま」という言葉はおかみさんという言葉より上品であるといつても「向うから魚屋のおくさまがいらつしやいました」というより「向うから魚屋さんのおかみさんがやつて来ました」といつた方が却て、美しくびく場合がありますから、いつもその言葉の使われる場を考えなければなりません。それからもう一つ考えていただきたいのは、すべてに御の字をつけるため、幼児の言葉を豊富にする妨げとなつていふことです。

A、それはどういふことですか。

B、幼児の語彙は、その半数以上が名詞であるといわれています。おとの半数足らずが動詞、形容詞、副詞等すべての品詞の合計です

そこで名詞も勿論大切ですが、名詞以外の言葉を出来るだけ教えたいと思います。ところが御をつけるため、すべて名詞の形にしてしまいます。「面をかく」といわないで「お面かきする」といい、「かえりなさい」でなく「おかえりしなさい」です。ですから言葉を丁寧にするのは結構ですが、あまり御を乱用しないようにしていただきたい、おや、とんだお説教になりましたね、言葉については問題がたくさんありますが、次の機会にゆずりましょう。

### ☆ゼスチュアはむづかしいか☆

A、言葉もなかなか面倒なものです、私もものもつと困るのは、ゼスチュアです。先生方のように表情や身振が出来ませんから。  
B、女性の方のお話をしないという理由はたいていそれですよ。しかしどんな話だつて、全然目玉一つ動かさずに出来る筈はありませんよ。私はこんなに考えています。ゼスチュアを特に考える必要は少しもないというのですこれなら安心でしょう。  
A、ゼスチュア無用論ですね  
B、いや、そうじゃありません。まあ、おき

、下さい、私の意見はこうです。言葉には二つの面がある、一つは音声言語、普通にいわれる言葉、もう一つは運動言語、これがゼスチュアと呼ばれている。この音声言語と運動言語と、一体となつたものが、我々の表現であり、言葉で二つを分離すべきものではないのです。例えば「太郎、一寸いらつしやい」という音声言語と、手招きをする運動言語とが一つになつて太郎さんと呼んでいるのです。ですからゼスチュアを特別に工夫しないで、自然に任せておけばよいでしょう。

### ☆「に」と「と」☆

A、それならお話が出来そうですが、果して子供がきいてくれますかしら、  
B、その御心配ごもつとも、そこで私は最初は出来るだけ短かい話をなさるようおす、めします。三分か五分いや一分位でもよいのです、こんな短かい時間ならどんな子供でもきつとしずかにきいています。そこで自信が出る、それからだんだん長い話をする、こうすれば大丈夫ですよ。私は先日ある幼稚園で先生の童話をききましたが、三十分以上の長い話なので、子供たちはすつかりあきあきし

ていました。この先生のお話は長いばかりでなく、「子供に」話していましたが尙失敗です。

A、おや、へんなことをおつしやいましたね「子供に」話してはいけないのですか。

B、そこです、話をする態度に二つある。一つは「に語る」一つは「と語る」です。「に語る」方は子供がきこうがきくまいがたゞしやべつてゐるのです。昔大阪から「子供と語る」という雑誌が出ていましたが「子供と語る」はいつも子供の反響を考え子供と語り合う気持で話すのです。必ずしも一々問答体で話すというわけではありませんが。

A、なるほど「に」と「と」と、たつた、てにをは一字の相違ですが、たいへんへだたりが出て来ますね。

B、まあ、おかあさんの気持ちになつてお話し下さればよいのです、上手下手は問題ではありませんよ。

A、どうもありがとうございます。せいぜい子供たちの楽しいお話を上げてあげましょう。